"MY TOWN" うぉっちんぐ

# 歩き&定ラテス 月デス

Vol.94

## 四国唯一の本ウダツ建築・高田鍼灸院（八幡浜市）

岡崎　直司
タウンツーリズム講座主宰・
近代化遺産活用アドバイザー

〝ウダツ〟という言葉を聞いて、あぁあれかと分かる人は何割くらいだろう。梲とも卯建とも書くが、常識の範囲に入れるには若い人には酷かも知れない。「うだつが上がらない」という諺もあるが、これとて世代によってはもはや死語に近い部類に違いない。取り上げるのは、建築様式としてのウダツ。

さて、前置きが長くなったが、中四国、九州では大変珍しい〝本ウダツ〟の建物が八幡浜に一軒ある。いや実は間もなく「あった」ということになるので、残念ながらここに記録する。場所は市内でも人家が密集する愛宕山下の片山町。昭和7年頃に建てられたというこの2階建ては、元々腕効きの左官だった矢野武木の家として建てられた。道を挟んで今も稼業されている高田建設さんは、かつて左官業として県内ではつとに知られた存在。その高田左官の先々代鶴一郎氏が大阪に行った際、目にした本ウダツの建物を設計し、その兄弟筋に当たる矢野武木が施工したという事らしい。

裏通りに面しているため、市民でも知らない人が多いと思われるが、愛宕山から見下ろすとその特異な屋根形状に気が付くハズ。通常の切妻屋根の両端が一段高くなっている、これが〝本ウダツ〟。つまりは防火建築の一種なんだが、京都辺りでは町家が櫛比していて、古くは有名な洛中洛外図にも描かれている建物の類焼を防ぐ形。このタイプの分布エリアは近畿及び中部地方。なのでどういう訳か四国には存在しない。いやいや内子町や卯之町、あるいは「うだつの城下町」で有名な徳島県脇町にはあるじゃないか、という向きはかなりの町並み通。でもそれらは皆〝袖ウダツ〟という文化圏。類焼を防ぐというよりは、ある種の威勢や装飾性に重きが置かれる。

四国の文化には無い本ウダツが、高田鍼灸院（旧矢野家）のみは前述の経緯によって八幡浜にたまたま出現した。そうした外観のみならず、内部にも見どころが多い建物なのでご紹介したい。

玄関を入ると、一枚板の上がり框（がまち）がまず目に留まる。いや気付かず

本ウダツの特徴がよく分かる屋根全景

一階部分は袖ウダツ

床の間落とし掛けはアベマキか

結霜ガラスの意匠性

にそのまま上がる方が大半か、それほど自然な造りの入魂作で、これは木ではなく年輪模様を左官仕上げとしたもの。

所々のガラス建具には〝結霜ガラス〟が使われている。これは明治から戦前期頃までの民家でよく見かける、個人的に好きな意匠。膠（にかわ）を使用する製作手間やコストの関係で今は作られないと思われるが、こうした味のある和テイストのガラスは復権に値する。

二階座敷には凝った書院欄間の組み格子〝麻の葉〟が見られ、床の間落とし掛けは野趣豊かな面皮付きの自然木、樹種はアベマキか？境欄間には四君子（蘭、竹、菊、梅）の透かし彫り、それぞれ文人画で好まれた春夏秋冬の草花。これら特徴的な花を描くことで、習字の永字八法のように筆遣いが習得された。麻雀をやる人なら花牌の方が分かりやすいかも知れないが。

二階座敷の書院欄間組み格子

何れにしてもこの建物からは、左官、大工、指物師などの手わざが至る所に見られ、まさに職人文化の集合体。映画は総合芸術という言い回しがあるが、こうした古民家においては、それは総合文化だとも言え、消えゆくものに対する哀惜は、こうした情感から生まれてくる。豪邸ではないが、質実で生活実感があるこうした得難い建物を継承し得ない地方都市の現実、果たして私たちの〝文化のウダツ〟は上がるのだろうか。

左官仕上げの玄関上がり框